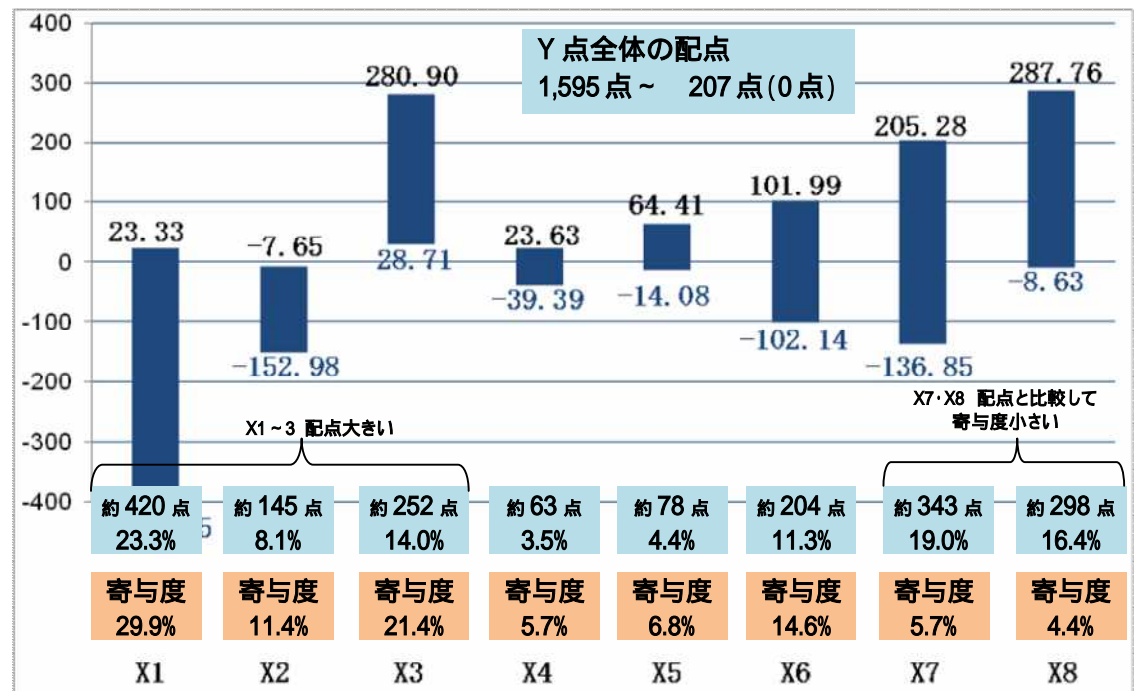




WiseNET 2012.1

< 兼業事業 >

図1 Y点(経営状況)の配点割合



先月号では「Y点(経営状況)の配点構造を考えて、苦しい時を乗り越える方策を見つけなければなりません。」と述べましたが、Y点(経営状況)の配点構造はどのようになっているのでしょうか。

Y点(経営状況)は、最高点1,595点、最低点0点となっていますが、Y点の計算式から導き出される点数は、最高点1,595点、最低点マイナス207点となっています。したがって、最高点と最低点の差は1,802点となります。そして、各指標への配点は右記の表(右記の図では、各指標の棒の長さ)のようになっています。配点は一律ではありません。比率計算の指標で配点が高いのは、純支払利息比率(X1)、総資本売上総利益率(X3)、自己資本比率(X6)です。逆に配点が高いのは、売上高経常利益率(X4)、自己資本対固定資産比率(X5)です。営業キャッシュフロー(X7)、利益剰余金(X8)は絶対的の力量指標(数値の大きさで配点する指標)なので

配点は大きくなっていますが、実際に獲得できる点数は大きくありません。したがって、国土交通省が算出した実際の会社のY評点への寄与度は高くありません。その分、X1からX6の指標の寄与度が計算上の配点割合より高くなっています。(図及び表参照)

先月号の事例で考えますと兼業事業を始めることにより売上高が増えますので、純支払利息比率(X1)、負債回転期間(X2)で点数が上がります。これらの指標は配点が大いのです。一方、この兼業事業は営業利益がゼロなので、売上高経常利益率(X4)で点数が下がります。しかし、この指標の配点は少ないので全体では点数が上がることとなります。また、この兼業事業の売上総利益率は10%ですので、売上高が増えるに従って総資本売上総利益率(X3)も増えます。この指標の配点も大きくなっています。利益がゼロの兼業事業でもY点(経営状況)は上がるのです。

一方、先月号の事例では、利益の増加によるY点(経営状況)への影響は軽微でした。利益の増加は自己資本対固定資産比率(X5)、自己資本比率(X6)、営業キャッシュフロー(X7)、利益剰余金(X8)で点数が上がるので利益を増やすのが企業にとっては一番大切なことです。ただ、各会社の内容にもよりますが即効性があるわけではありません。事例では税引後利益が120万円の場合でも、全体に対する影響力は小さくなっています。やはり、各企業において上げやすい指標はなにかということをも十分検討しなければなりません。

自社の置かれている環境を自社の都合のよいものに変えることはできません。置かれた環境に順応して自分自身が変化していく努力が必要です。

WISENET編集部 松村 清(税理士)